

# 湛海

季は	地は	ワキ
子方	トモ	鬼
シテ	従者	一法眼
雜	長谷部湛海	
京都	沙那王	

「かやうに候ふ者は。二条堀川に居住仕り候ふ鬼一

法眼とは我事なり。さても故左馬の頭義朝の八男。

沙那王殿と申すは。某師弟の契約仕り候へども。

いさゝかの子細候ふ間。ひそかに討つて捨てばや  
と存じ候。然れども兵法勝れ給ひ。麿忽には叶ひ  
難く候ふほどに。婿にて候ふ長谷部の湛海。彼は  
器量第一の者にて候ふほどに。彼を頼み討たせばや  
と存じ候。いかに誰かある。

トモ詞  
「御前に候。」

ワキ  
「汝は北白川湛海坊へ參り。少し談すべき事の候ふ  
間。御出であれと申し候へ。」

トモ  
「畏つて候。」

トモ詞  
「如何に此内へ案内申し候。」

シテ詞  
「誰にて渡り候ふぞ。」

トモ  
「鬼一法眼よりの御使にて候。申し談ずる事の候ふ  
間。唯今御出であれとの御事にて候。」

シテ「心得てある。やがて参らうするにて候。」

トモ「如何に申し上げ候。湛海の御出でにて候。」

ワキ「此方へと申せ。」

トモ「畏つて候。かうく御通りあれとの御事にて候。」

シテ「さて唯今は何の為めの御使にて候ふぞ。」

ワキ「さん候唯今申し入るゝ事余の儀にあらず。内々申す如く沙那王殿某が秘蔵の兵法の一巻を盗み取り候ふ程に。彼者をひそかに討ち取り。卷物をも奪

ひ返さばやと存じ候。誰々と申すとも。貴方ならでは沙那王を討つべき人はおぼえず候ふ間。さて申し入れ候。」

シテ「言語道断の事にて候ふ物かな。此上は某が手にかけ討ち取り候ふべし。御心安く思し召され候へ。たとひ猛威を振ふとも。やはか討ち損ずる事の候ふべき。」

ワキ「誠に頼もしき御事にて候。さらば沙那王をすかし

出だし。五条の天神へつかはし候べし。御身も跡

より御忍びあつて。あれにて討つて賜はり候へ。

シテ「實に此上はともかくも。片時も急ぎ申すべし。御心安くおぼしめせ。

地「御心安くおぼしめせ。さらばよ鬼一是までぞ。彼小冠者を討たずは。此後御目に懸かるまじ。手取りにせんと広言し。座敷を立つて湛海は。帰る心ぞ恐ろしき。く。

子方一声「さても沙那王は。師匠の仰せに従ひて。五条の天神へ参らんと。

地「夕顔の花の宿。く。五条あたりのあばらやの。

其跡訪へば黄昏に。よそ目はせじな一筋に。頼む誓ひの末清き。五条の神に詣でけり。く。

「待つほどは苦しき物か郭公。一声急げ暁の空。さ

れば湛海其夜の出で立ちには。黒糸威の腹巻に。

白柄の長刀うちかたげ。沙那王おそしと待ち居た

り。

子「かくとも知らで沙那王は。神前を挙し奉り。立ち  
帰らんとせし処に。

シテ詞  
「湛海早く見つけつゝ。すはや是ぞと近づきより。  
如何に沙那王殿。夜陰の帰るさの覚束なさに。御  
迎へに湛海参りたりと。さもあらけなく云ひけれ  
ば。

子「あら思ひよらずや。我身に取つて湛海に意趣はな

し。さては鬼一が下知にしたがひ。某が討手に向  
ひしよな。如何に湛海。いかなる意趣の有りて。  
我を討たんと思ふぞや。

シテ  
「あら事々しや意趣までもなし。お事のたくみ顕は  
れたり。尋常に勝負あれ。日頃の広言唯今なるぞ  
と。長刀やがて取り直し。

地  
「長刀やがて取り直し。無慙や小冠者嵐となさん  
と。踊り上つて切り払ふ。元より沙那王騒がば

こそ。日頃ならひし秘術は。今こそこゝにあらは  
し衣の。飛鳥の翔りに。左足をつかひて切り給へ  
ば。湛海も大長刀を。水車に廻してかゝれば。ち  
やうくと透間を切り。さばかり猛き湛海も。御  
曹司の小太刀に切り立てられて。あきれはてゝぞ  
立つたりける。さても無念の次第やな。くと。  
走りかゝつて突けばはづし。討てば飛び。乗すべ  
ば乗つて手もとにより。しさつて払へば飛び上り。  
飛行自在に戦ひ給へば。今は湛海勢力尽きて。頼  
む長刀打ち落とされ。組まんとすれば切り払ふ。  
かげろふ稻妻姿を失ひ。たゞよふ処を首打ち落と  
し。喜び勇みて牛若は。く。鞍馬へ帰らせ給ひ  
けり。